

曾祖母が亡くなって五年。ぼくたち家族は、空家になっていた曾祖母が暮らしていた家を片付けることになりました。

曾祖母の家のカギを開けると、なつかしい匂いが広がりました。そこには、タイムスリップしたような曾祖母が生きていたままでの世界がありました。

少し薄暗い曾祖母の家の納屋を片付けていると、ぼくが今まで見たこともないものが置かれていました。資料館にあるような昔の道具の数々。ぼくは、片付けどころでなく初めて見る道具に興味津々でした。「これは何?」「どうやって使うん?」「だれが使っていたん?」次から次へと沸いてくる興味とワクワク感。父や母は、片付けしていた手をいったん止めて一つ一つの道具の使い方を教えてくれました。

その中で、ぼくが一番関心を持ったのは、欠けやひび割れを丁寧に修理している一つの茶わんでした。ゴツゴツした手ざわりで少しゆがんだ形。持つとずっしりと重い茶わん。けれども、ぼくにも伝わってくる、ほっこりとした温かさがこの茶わんにはありました。

その茶わんの底には「常雄」という文字。ぼくの曾祖父の名前でした。母によると、曾祖父は、趣味で陶芸をしていて色々なものを製作していたそうです。それなら、ひびが入ったり欠けたなら、新しい茶わんをまたつくればよかったのに、と一瞬ぼくは思ったけれど自分で新しい茶わんをつくり出せる技術はあるのに、それでも一つの茶わんにこだわる曾祖父の物を大切に作る心と、それだけ曾祖父の思い出が強かった茶わんだったんだと知り、初めて見る茶わんなのに、ぼくは、なぜか愛着を感じていました。

ぼくは、結局、曾祖母の家の片付けには、ほとんど貢献できなかったけれど、先祖の生きていたそれぞれの時代の生活や一つの物をとても大切にしていた物との関わりを知ることができました。

家に帰って、ぼくは、ぼくの物との関わりをふり返った時、今までぼくには、「壊れたら捨てる」「汚れたから買いかえる」という考えしかなかったことに気が付きました。

ただ一つ、ぼくが長い間、修理してまで使っていたのが、ふで箱です。小学校入学の時に買ってもらった箱型のふで箱。両面がパカッと開き、さっと全てのものが取り出せる優れたふで箱です。しかし、しばらく使っているとプラスチックの部分が割れ、ビニールの部分がやぶけてしまいました。それでも、その度に、修理しながら使っていました。しかし、高学年になった時、友だちから「ボロボロやで。いつまで使うん?」「一年生みたい」とからかわれるようになり六年生になる時に愛着のあったふで箱からペンケースに買いかえることにしたのです。

ところが、先日のこと、大学生の人がSNSに上げた小学一年生の時からずっと使っているというふで箱が話題になっていました。その写真は、ボロボロのふで箱だったけれど、十年以上も一つのふで箱を使い続けている大学生が、ぼくはカッコいいと思いました。

今、次々に機能が整った便利なものが開発され、新しいものが優れていて、古いものがおとっているような考えが、世の中に広がっています。けれども、同じ時を共に過ごすものに愛着を込めて使い続けることも、ボロボロになっても、それをまた、魅力として楽しんで使い続けることも、すばらしいことだとぼくは思います。

ネットショップや100円ショップでも欲しいものが、簡単に手に入る時代だからこそ、ぼくは、「物を大切に作る心」も持ち続けていきたいです。